

特 114

262

三面子速

詠風柳樽全集小就了



始



特114
262

三面子述



誹風柳樽全集に就て

發行所 柳書刊行會

大正
14. 10. 6
内交

四月十八日武笠山椒兄と同行葉山の別墅に岡田三面子を訪ふ子一綴の原稿を示さる、披見すれば大正十三年十月國書刊行會にて發行したる「誹風柳樽全集」と子珍藏の寛政度以後の柳樽改刷本及びその以前の元刷本と三種の柳樽を克明に比較考察し、其削除せられある句や、重復せる句や、丁數の混雜や句列の入替や誤版や誤字を細大洩らす、一々指摘せられたものにて、紙數は二十頁足らずの小冊子なれども豊富なる蘊蓄に非常の力と多大の時とを加へて成りたる、他の容易に企て及ばざる珍稿であつた。

恰も岐阜の岐川兄が「柳樽研究」と題する純川柳研究の月刊雜誌發兌の畫策熟し、近々其創刊號發行の筈なれば、同誌第二號に登載して一般川柳家に示さば其裨益するところ甚大なるべきと確信し、その讓與を懇請したれば即座に快諾此貴重なる玉稿を投與せられ、鬼の首を取つた程の手柄を誇りつゝ、翌日早速岐川兄に向け郵便に附したのである

大正十四年九月一日

東京中野の僑居にて

柳雨・しるす

誹風柳樽全集に就て

三 面 子

大正十三年十月、國書刊行會の發賣した本書は、明治四十四年に、同會が刊行した近世文藝叢書第八第九の合本で、初編から六十編までが納めてある、全部百六十六編ある中の六十編だけに對し、全集と名けるのが既に不當なるのみならず、編者は、寛政度の改革以前に發行せられた元刷と、以後に發行せられた改刷本とを、よく區別せずして材料とした爲め、後に列擧するやうな脱漏と重複とが犯されて居る。

寛政度の改革の由來は、簡單ながら、其要領を書いて送つて置いたから、多分雜誌東京の五月號か六月號に載る筈、それは爰には省く。

其際公序良俗に反すと認め、初編から廿九編までを通じ二編には無し削除せられた句、今日まで見出し得た合計が三百二、其内譯、博奕五十九、間男四十、刑罪三十一、心中二、へ○△二十四、罌丸三、包莖二、陰毛六、いけつび一、枕繪七、下女十九、後家五、夜這十、する十七、くち○二、腎虛五、紙一張形九、殿女二、出合茶屋六、轉び五、大名冷評十一、御家騒動七、吏三、留守居二、武士三、一般風教十五、意義未詳四、不當削除一、である。

其削除した跡を埋める爲めに、句を分載して削除せられた元刷本の丁が左表の如くである。

全集は元刷本を材料として、改革前の丁を載せて居る所と、改刷本を材料として、削除せられた丁の抜けて居る所がある。

元刷本の削除せられた丁数

全集

- 1 四編 十三丁 無
- 2 五編 十四丁、卅七丁 無
- 3 六編 廿四丁 有
- 4 八編 卅九丁 有
- 5 九編 十一丁 有

註 六編の十六丁十七丁と、九編の卅三丁卅五丁とは、重複した句が二十二あるが、生の藏する六編三冊、九編五冊皆其通りであるから、其どちらかを削除したものであるか否や、断定しかねる。尤も元刷で重複して居る例は、他にも少くない、例へば廿三編卅一丁乃至卅五丁と、卅一編九丁後半乃至十三丁とは、そつくり重複して居る。

- 6 十編 七丁 無
- 7 十一編 十七丁、十九丁 有
- 8 十二編 廿一丁、卅七丁 無
- 9 十四編 廿四丁 無
- 10 十八編 廿七丁 有
- 11 二十編 二丁 無
- 12 廿一編 廿二丁の二 無
- 13 廿二編 十丁 無
- 14 廿三編 廿三丁 無
- 15 廿四編 廿七丁の二 無

そこで全集が、如何なる失態を演じ居るか云ふに、句を分載して削除せられた丁が無の場合、其句が所々に散亂し、其丁が元刷本のまゝ載つて居るのは、それとそれを分つて載せた所と重複して居る。

古版拂底の折柄、全集を以て古川柳の参考として居る人も少なからう、この關係を知つて居ないと、時代の相違などから、飛んだ

間違つた断案を下す人も有らうと、今日まで生の調べて居る事だけは、以下全部を説述する。

三十編及び其以下には、寛政度のやうな改革の爲に、句を挿し替えたとは無いらしい。

一 全集六一頁上段 尺八も男も 百九軒ながら留守 の間に、元刷四編十三丁が欠けて居る、該丁は、六編へ十三句、八編へ一句、五編へ一句、十一編へ三句、計十八句全部分載して削除せられたもので、全集にその散在して居ること左の如し(上下は上段下段)

元四編十三丁

全集散在頁

思ひ切る姿の出来る雨舎り

九七下

註 全集には、姿のこぞる と成つて居るが、此句は初代川柳評前句附万句合、明和三戌年合印宮二裏にあるのを抜いたので、生の藏する四編二冊も、其万句合も、共に 出来る とある。

まだかよと苦勞に思ふ里の母

九二上

註 柳樽も全集も まだよか と成つて居るが、其原本万句合、明和三戌年合印宮三表には明に まだかよ とある、娘が姫に行つて、まだおなかのふくれぬのを氣にする母の情。實は餘り出来ない方が可い。

- 傀儡師箱を叩くが乗り地なり 九二上
- 姉聲とよもやは母の手抜けなり 九二下
- 子煩惱小判持たせて困るなり 九二上
- 今頃は灰に成つたと燈籠を見 九六上
- 權柄を云ふのが乳母の癖になり 九三上
- 大部屋の持佛はめて十貫目 九二下
- 去り状を書くうち質を請けにやり 九六上
- 下駄を見に要らぬ豆腐を買ひに行き 一〇二下
- 一ト喧嘩して女房は質を出し 同
- 先づ盤の足を捻ぢ込む下手將基 一〇二上
- 赤腹を釣つて箱王叱られる 一三〇下

註 赤腹は箱根の湖水に産する魚、箱王は曾我五郎の幼名。

柳花女の出る土弓場は流行るなり 一九二上

晝飯を外からどなる手習子 七五下

コソ／＼と談せば妾氣に掛ける 一三〇下

御妾の母は大きな願を懸け 一八八下

女房の諷餘ッぼどひごく酔ひ 一八八上

二 全集七九頁上段 しばらく居る 附け

上げせの間に、元刷五編十四丁が落ちて居る。

それは、七編へ五句、八編へ八句、十九編へ

四句 行衛詮索中一句、で削除せられたもの、

之を分載して、全集に散在して居ること左の通り。

元五編十四丁 全集散在頁

どの幕へ行くと藝子を尾けて行き 一三七下

絲髪の日那はものが言ひ易し 一四八上

後ト押へ通ると杵を振上げる 一一〇下

ダと云つて今百兩は出されまい 一三八上

金平の夢を見て居る枕蚊帳 一三八下

まな板へあられて疵を附け初め 一一四上

飛鳥山バタラ三味線百で借り 同

入れ髪をして品川をヤタラ譽め 一一三下

口に戸を立てぬと御菜勤まらず 一一四上

懸け取りの後へ廻はすは丈夫なり 行衛未詳

正宗を喰つたと質屋ソツト云ひ 三五二下

立つて居て座頭の濡れる俄雨 三四九上

着替えずに芝居歸りの夜を更かし 同

天蓋をブル／＼として吹初め 三四九下

降て来た何とごぞへこぞらうか 一三三下

二人リ目は女房の傘を貸して遣り 一三二下

國境美濃の方では油断せず 一三三下

勾當の不足はタツタ二三寸 一三二下

三 全集八八頁上段、あやめふき、ふいに出

る、の間に 元五編三十七丁、それは 七編

へ七句 八編へ五句 九編へ一句 十九編へ

五句分載して削除せられたもの が落ちて居

る。

元五編三十七丁

五尺ほど 書出しへ一歩遣り

逃げ尻で飼ひば喰はせる寺男

いッち好い町はドン／＼カツカ也

まだ死にもせぬのに泣いて叱られる

ちツとベイ芋は有るがと村仲人

梅若は旅陰間には嫌と云ふ

ヤレでかい巧ミをしたと田舎公事

八百屋から賣るとは俗の知らぬ事

もちツとの事で日蓮片見月

五十ぞう留守のやうなは客が有り

明日でも刺つてくれろと飛車がなり同

まアうんと言へど無盡の指を折り

推量で向ふ棧敷の貰ひ泣き

股倉へ手を突ッ込んで下女勵ミ

註 全集三五二下 おきやがれ 天竺の

樂人の間に有るべき等それが無い、編

全集散在頁

一五六下

一四三上

一四四下

一一六上

一三五下

一一〇下

一四三下

一一五下

一三二上

一一二下

三五二下

同

者が句意を誤解して削つたのであらう、其外にも全集三五二下には 汁の實 嫌はれる の二句が削られて居る。

烏帽子親伯父の仇も討てと云ふ 三五下

御の字に成つたと花見支度する 三五二上

行水に寐るほど癖は園はせる 一一〇下

どうしても泊つて来たが亭主負け 同

四 全集一〇一頁上段 若死にと から下段

草鞋喰ひ、までの十八句は、元六編廿四丁で

四編へ七句 六編へ十句 廿編へ一句 分載

して削除せられたもの、全集は此丁を元刷本

に基いて載せたから、左の如く重複して居る

全集一〇一頁上段下段

若死と聞いて悔ミに念を入れ 重複頁 七二上

寺小姓とぼしかけ程巻いて居る 同

始女もおんなじやうに塗り廻し

註 全集九四頁上段 櫻花 下段 心中

の間に有るべきのが、落ちて居る。

風呂敷を解くと駈出す真栗瓜 六六下

京女立つて垂れるが少し疵

註 全集六〇頁上段 大三十日 とち

よろツこい の間に有るべきが、漏れて居る。

鳥籠の掃除糞屋ほごにする 六二下

偽はりを云ふかも知れず梓弓 九三下

寐坊奴がと張良叱られる 九八上

行くと先づ邪魔だと渡す根津の客 五八上

註 此句柳樽には、この本も根津のぎう

と成つて居るが 妓夫 では意味が通せ

ぬ、底本たる明和五子年万句合、合印札

六オには明に 客 と書いてある。

どのうらへ行つても持てぬ淺黄裏 一〇七上

註 底本の万句合も うら と讀めるが

恐く うち の誤ならん。

古着買庫裡に引導聞いて居る 一〇八上

持つ程の物に字を書き抜け詣り 一〇二下

ゲツブウをしてから搗屋二杯喰ひ 六七下

乳母ちつとたしなめ位屁ともせず 一〇四上

大和茶の婆々ア芋斗りうんで居る 一〇六上

大名は小判の中によく寐入り 同

草鞋喰ひ迄は能因氣が附かず 三五九上

五 全集一四四頁下段 女房は焼かぬ から

一四五頁上段 うつゝくが、までの十八句

は、元八編卅九丁で 三編へ二句 十編へ九

句 十二編へ七句 分載して改刷の際削除さ

れたもの。

全集一四四頁五頁 重複頁

女房は焼かぬが立てゝいぶすなり 一七八上

さう酷く言はぬものだとにちり寄り同

藏宿へ廻るで四ツ手百高し 一六八上

御知行は末社ほどある神の末 二二二上

若い手を借りて娘の灸をする 二二二下

死ぬ者が損とは後家へ當て擦り 二一六下

兄弟の中へ寐るから中納言 二一七上

いさぎよく療治を頼む向ふ疵 二一七下

ゆふべのは口舌今朝のは喧嘩なり 二〇七上

朝顔は朝寐の者にしかみつら 二一三上

腕へ巻き附けて物干借りに来る 一六八下

註 全集に 腕へ物巻きつけて とある

物は行。

御妾の晝間は至極無口なり 一七五上

女房の苦勞草木黄ばみ落ち 一七四上

盃が何處らへ来たど料理人 一七一上

仁王門そのかミ鳶のあつた所 一七二上

元服も二タ剃刀は女なり 一七〇下

アラの出る長口上は鐘の銘 四二下

うつゝくが居ようと覗く松が岡 五三上

六 全集一五一頁上段 元九編十一丁 とそ

れを削除分載した個所との重複左の如し。

全集一五一頁上段 重複頁

好い潰れやうさと替女は譽められる三五〇上

兄様としやれてせなアに會ひに来る三五一上

立聞きは今来たやうに内へ入り 三三八上

雪隠で葡萄一ふさ御用喰ひ 三四六上

ぶツ攫へをると踊子胴突かれ 一六二上

日暮れから圍はれへ来るよ入道 一六二上

捨てられた伯母も全体喰らひ抜け 一四九上

ごなたど中將姫はまぼしがり 二九八下

烟草入きみやう頂來だご探がし 二九八下

待つて居る座頭は指の垢を燃り 四六上

好きな乳母本屋を吐りく見る 削

註 此句は改刷の際、全集一五〇頁下段

(元九編十丁) 間男もかりそめながら二度

目なり を削り、其跡へ挿入せられたも

の、然るに 全集は 間男の元句が残り

好きな乳母の方は削られたるなり。

行廻りかん廻り来る出来た奴 一五五上

百人の中へ一聲ほごぎす 一四八上

抜け殻のいくつか出来る花の留守 一六七上

田樂は田で楽しむのよみがあり 同

檢校の妾ものごしの好い女 一八一上

奈良物は内分で済む道具なり 同

茶の會へ常の天窓は下毛に見え 一六四下

七 全集一六八頁上段 姿見へ近く寄つては
顔が無し 道成寺花見にへちをまくらせる
の間に元刷十編七丁左記十八句を脱す。

元十編七丁

全集散在頁

安松魚得心づくで惱むなり 二三七下

尼寺は男の意地を潰す所 二三八上

真菜瓜一ツよじく持つて来る 二四一上

夕冷に成つて出ようと懶け者 同

親分の理詰よしかをヌケに言ひ 同

角兵工獅子ねれけて来るご仕廻也 二二五上

責められて下女留守の事有りつたけ 二五四下

きつい野暮坭坊らしく引つ張られ 二五〇下

藪醫其くせにうるさく多言なり 二八七上

花の雨下女色揚げをむごい事 二四三上

鐵釘と蚯蚓と下女は取りかはし 二四〇下

下女が文かくもんだなど覗かれる 二五五上

蹴轉見世地犬のやうな神を抱き 二四九上

茄子賣り二ツと三ツつゝ掴ミ 二三六上

山門へえゝ年をして上がるなり 二二七下

美しい神子打葉のやうになり 二二八上

一步でも有るうち息子捉かまらず 二二六下

二三ヶ所經廻つたごは見えぬ姫 同

八 全集一九一頁上段 比類無き難言を聞く

朝歸り から 同下段 何事か親分畏まつて

居る までの十八句は元十一編十八丁 同下

段 前表は薄いちざりにぶら下がり から一

九二頁首 告げ口をするで不如意な諷の師

までの十八句は元十一編十七丁であるから、

前後顛倒して居る、のみならず 元七十九

の二丁は後に削除されたのであるから、左表

の如き重複と成つて居る。(511は五編十一編)

全集一九一頁下段

重複頁

前表はうすきちざりにぶら下がり 二六三上

度々勅使餘の儀に非ず雷のこと 二六四下

駿河から遠江まで肩車 ?

御殿者来て下だんせを忘れかね (改五三オ)

飯櫃へ顔を突ツ込む暑いこと 八九上

四ツ手駕月の都を指して駈け 八八下

祇王祇女田舎娘に押ツべされ 七六下

十四日昨日は胴で今日は首 八三上

寐たがつて掛取を待つ好い工面 八九下

俄雨駈けられるだけ駈けるなり 一八四下

縛られて居るが喧嘩に勝つた奴 七九上

木の端でまのが海のはたを行き (改11三四ウ)

一文は取りさうもない形で吹き 九〇上

座敷牢大工を入れてめて見る 一九八上

貞女ぶり今じや元値にしかねたり (改13二八オ)

塀越しに有るに高繩越えて行き 七九下

鴉毒を切らすまいぞと呂后云ひ 二三二下

告げ口をするで不如意な諷の師 一九七下

全集一九七頁上段

重複頁

九 全集二一八頁上段 餘の船で見ればやつ
ぱりたゞの松 怖いもの見たし生醉観覗き
の間に元十二編廿一丁、左記十八句が脱けて
居る。

元十二編廿一丁

全集散在頁

嫌の着替えるのを覗くと縮むなり ?
不斷着て番當えらい事をする ?
しろものと見えて棧敷に目立つなり?
むごい事羅綾の袖へ鈴を附け ?
あの人こそして誰だど下女が母 二三四上
氣の知れぬ客簪を抜いて寐る 二二八下
天さう正直菊石が賣れ残り 二二三上
俗の氣が放れぬで後家目立つなり 二二二下
縫ひ習ひ譽めるとどつか持つて行き?
一人者かみさんたちに駈られる 二三〇下
ちんば引き乍らマチンを買ひに来る 二三五上
そろ／＼と後家を邪法へ勧め込み 二二四上
慾に目がくれて牡丹餅喰つて居る 二二四下

三味線を爪で弾いて、探がさせる 二一四下
盃を眞ン中へ廻差して逃げ 二〇六上
錠がせつかん針が出て取りさへる 同
木綿賣京談を云ふ要らぬ事 二〇五下
可笑しさは夫婦喧嘩を狎が吠え 二二一上
十 全集二一八頁下段 生きて居やすりや廿
五と七回忌 馬に成る役者は男二匹なり の
間に元十二編卅七丁 左記十八句が落ちて居
る。

元十二編卅七丁

全集散在頁

阪東の十三番を四ツ手抜け 一一九上
仇をばカラリコロリと附けねらひ 同
言ひ負けた方からぶつて掛かる也 一三九下
盤臺に升と親とが二ツ三ツ 一四七上
鏡磨逃がさぬやうに押へ附け 二二〇下
氣の毒さかいどう湯漬喰ふとむせ 四九下
簪をふどころにして木戸を出る 同
薪水の勞を助ける下女が色 一三九下

一〇

其きざし有つて羽織を持たせたり 同
賽日に御用きん／＼もので出る 一一〇上
百の貸それ覺えてか日待の夜 一五三上
樊於期が首はおさきに使はれる ?
田樂へ吸付けに来る夕涼 一一二下
御寺様これはむごいと湯屋で云ひ 一二四上
金持の聲色で替女口説かれる 一一八上
なせ貫目ものと云つたと端女にぢ 同
七月の八日玄宗頭痛する 一五三上
惚れた奴飯時分には歸るなり 二二〇下
十一 全集二五〇頁下段 よきにはからへで
頼朝事は濟み 伊勢の留守女房あこぎな事を
する の間に 元十四編廿四丁 左記十八句
が欠けて居る。

元十四編廿四丁

全集散在頁

生酔をひよつと押へて放されず 三二八下
逃げたあと禿は酔つて他愛無し 三一九上
見えてゐて行かれぬ所遠江 三二五上

五ツ緒の車はえゝが大喰らひ 三二七上
行く時は紅葉で天窓隠すなり 三一二下
物差を廻へ投げけるは美くしい 二八四下
侍の遊び大小投げ出だし 三一五上
海山を越えて行くのにさしてゐる 三一三下
吉原へ行くはと亭主やつてのけ 三一二下
下ゲにするさうで相手は髪を結び 三一四下
野暮な事ごこへおいでと土手で云ひ同
ごりや俺も吞まうと乳母へたよる也 三一五上
貴様とはもう／＼嫌と引ツ立てる ?
母猪牙を上がつて二ツ三ツよろけ 三〇五下
氣の知れた菊石を連れて出合茶屋 二九四下
源左工門跨ぎ廻つた所領なり 二八〇下
離れ山けんとくにする女旅 二八三上
高倉は御いとしなげに抱き込まれ 二五三上
十二 全集三二八頁上段 きたアねい顔で關
取かしこまり から 湯戻りの子僧を亭主左
り前 までの十八句は 元十八編の廿七丁で

八編へ一句 十七編へ六句 十八編へ一句
廿編へ五句 廿八編へ五句 移挿して削除せられたもの、全集の重複左の如し。

全集三二八頁上段

重複頁

きたアねい顔で關取畏まり 三二一上
二人り扶持粽へ添えて遣り初め 一三一上
直ぐに熟談好い男好い女 三〇〇上
眞ッ黒な餅を鷹には見せて置き 同
オギヤア〜と連れ節の耻かしさ 同
天窓を丸めて頼政要らぬ事 同
梅に鶯櫻に生醉なり 同
賽日に髪結引く手数多なり 同
知りもせぬ醫者を呼込む卒中風 四九八下
大黒の外を目懸ける悪るい奴 五〇二下
後家の質男物から置き初め 三五四上
惜氣なくぶちまけ主へ上げんしやう 三六五上
芳町へ行くのは和尚たちのまゝ 三六一上
清水を祈れど恙は抜けぬなり 三六〇下

あつけない夜を傾城にすねられる 三六三上
ブリガレン知らぬに家中氣が附かず 五〇七上
ビイドロは心遣ひの土産なり 五〇八上
湯戻りの子僧を亭主左り前 同
十三 全集三五四頁上段左から五、六、流行る奴夜中出店を歩るいてる 袋ごと遣ると泣き止む下卑た餓鬼の間に、元二十編二丁十八句、其中 廿編へ二句 廿一編へ五句 廿二編へ五句 廿三編へ三句 廿九編へ二句 行衛未詳一句 を移挿して削除されたのが抜けて居る、其移挿散在して居る個所左表の通り。

元二十編二丁

全集散在頁

程過ぎて氣附けの錢を聞いて遣り 三五六上
帽子針はッ立て尻に成つて挿し 四〇八上
番附の錢を御門で乳母借りる 四二二下
外科の箱小僧何だか甜めたがり 四二二上
嫌な男も來ようなど淺黄言ひ 五二三上

毎日耳に附いたあと餅を投げ 三九一上
譽まれさは久振にて人が濡れ 五一九下
二度とは連れぬと櫻へ下戸縛し 三七二上
流行醫者駕に手紙が二三通 行衛未詳
つくねんと華蕊の上に三時座し 四一八下
四季折々の戯むれに母困り 三七八上
色香妙にして常の下駄に非ず 四〇三上
火を一つ呉んなはケチな團ひ也 四〇二下
江戸の客白人(及)骨を砕くなり 三八〇上

註 全集三八〇頁上段 白人は祇園及び

島の内などに居た私娼。謠曲兼平 白及骨を砕く 頼政 紅波楯を流し白及骨を砕く の文句取。

村の頼今戸の土偶で難祭 三七四下
中秋はドラに實の入る時分なり 三七七上
野に暮らす奴等が眞間へ二三人 三六九下
駕に乗る迄四郎兵衛が前に立ち 三九四上
十四 全集三八一頁上段三、四 子供にも草

履隠しを儒者させず 押ッ被ぶせられたと云はにや釣合はず の間に 元廿一編二十二丁左記十八句を脱す 尤も廿一編は二十二丁が二枚ありて二十四丁無し、元刷の際或は其内一丁を二十四丁とする考なりしならんか、改刷の際左の十八句を 廿五編へ十一句 廿編へ一句 廿八編へ四句 廿二編へ二句 分載して其一丁を削除したのである。

元廿一編廿二丁の二

全集散在頁

三ッ蒲團積もらせて見て切れるなり 芭蕉葉を寺で貰つて叱られる 品川で打つたは寺で勝つた放蕩 註 此三句は元廿五編二四丁裏左の三句 御隠居はノロりと出してなせ笑ふ 酔つた奴翠丸までも肌を脱ぎ 雁列を亂してばれる村出合 を削り、それに替えて移挿したのである 全集四五七頁上段第一句と第二句との間

にあるべき筈が、全部落ちて居る、編者の用いた底本が元刷でないことは、左記の句で明であるから、恐く疏漏に基くならん。

藝者で放蕩を打つたのも百の内 四五六下
明かるんだ雲齋で出る安大屋 同
賽日の矢取り尻だの天窓だの 同
大石の中に軽石一つあり 同

類句 軽石も一つ交つて義を立てる 元
刷では廿三編廿三丁裏、改刷の際、初編
十九丁表 枕繪を持つて炬燵を追出され
の身替りに成つた同意義のもの。

下女鴨をなんにすべいと錢で取り 四五六下
大日坊が生きてると七兵衛 同
里の母悪る根性で暑氣見舞 三六七下
註 土用干で娘の着物が減つて居るか否
やを見ようぞ。
芝居をかこつけ昔は女郎買 五〇二上

いろは茶屋俗を素引くに骨が折れ 五〇一下
もう取つて下さるなよと母は請け 同
まさかの時に質に置く鎧なり 同
沸え湯よりひごくしたの甲斐の國四五七上
阿房宮羅切したのが羽利なり 同
通り者晝は眼に血を注ぎ 三九六下
朝はどうからおひんなり嬬を睨め 同

十五 全集三九四頁上段第三句と第四句との
間に、元廿二編十丁が脱けて居る。
元廿二編十丁 全集散在頁
罪無くて配所の月を佃見る 五〇二下
其晩は片練れに成る機足の 同
口説き損じた女房は氣味悪るし

註 此の句は右の其晩は片練れの次にあ
るべきのが全集には無い、故意に省いた
のなら、其晩はの句は、ごんな意味か。
覆水盆に歸り内々で入れ 五〇二下
物申の呆れて歸るすらい家 五〇六上

樽酒であるのに内儀出す氣無し 行衛未詳
怠屈なもんだと堅い川づかえ 同
疊敷く助言の多い十三日 四八九下
年玉ソツクリとヨウロヨロ歸り 四二六下

だアまつて針で突く眞似うまい奴 四二七上
具足櫃紙ひな一ツ紛れ込み 同
註 此句を移挿した柳樽廿三編四十二丁
表には

具足櫃紙ひとつ紛れ込み
とあり、全集四二七頁上段には
具足櫃紙ひとつ包み紛れ込み
と成つて居るが、ひとつ包み、としたのは

全集の編者の憶測に出たのであらう、元
刷廿二編十丁裏第一句に明に、紙ひなひ
ひとつとある、土用干の句？

餅米を檢校むしやりく噛み 四二七上
黒猫を短かい玉の緒で繋ぎ 三八九上
七くさを叩く所へ暮の人 同

大人に乳を振舞つて乳母不首尾 同
ウサンといふ匂ひ女房鼻ぎ出だし 同
五十貫貸して編笠にも成らず 同
百人の天窓の上にしつけかた 四四二上
むごい事息子の側に黒い猫 同

十六 全集四一八頁下段 首打落としど、唐
人と布袋との間に、左記元廿三編廿三丁が落
ちて居る。

元廿三編廿三丁 全集散在頁
太鼓持珠數で拜んで叩かれる 四五七下
白無垢を脱いて浴衣で床へ来る 四五八下
切落し向ひは首を探ねてる 四八九上
チンコロを帯廣解けで捨てに出る 同
梅の木を後家はふさしく提げる 同
コソ／＼に濁りを打つて札に来る 行衛未詳
哥かるた下女股倉へ取り溜める

註 此句は元初編四十丁表 坪皿へ紙と
はよほど學が長け を削り、其跡へ改挿

したもので 全集一二頁下段 持參金疮
瘡除と、根津の客家のひづみとの間にあ
るべきのが、全集には、元句も改挿句も
抜けて居る。

メツカチは大切だいじ盲目めくらはむごくする 五上
木でしたを見て來生きたを料らせる 一八七上
輕石も一つ交つて義を立てる 一下
法眼げんの勤めで四本木を植える 同
吉原はじゆ道が一つ欠けて居る 一四二上
借金は春永にして札に來る 三〇四上
虱いにたとへ數の子で叱られる 四六八上
輝いも要らぬと無理に貰はれる 四六六下
御装束を請合つて息子來る 行衛未詳
流行り色かつかちめいて息子着る 同
白無垢を着てスミツこに隠れてる 同

十七 全集四三九頁上段第二句 大不了簡
の次に元廿四編廿七丁の二を脱す、元刷の廿
四編には廿七丁が二枚あつて、句を分載し削

除したのは其廿七丁の二 左記十八句である

元廿四編廿七丁ノ二 全集散在頁
石町へ内裏を移す賑やかさ 四四二上
三會目金の減る木を持つて出る 同
腹の減る藝に息子は飽きが來る 同
後の月すんでに牢を破るところ 四三一下
名は小さいが氣の廣い國家老 四四五下
猫も枚子も吉原の邪よこしまをする 同
運の好き土手へ來る迄男なり 四三三上
傾城の箆かき何ぞか有りは有り 四九五上
雁かりを射た其矢で化鳥けり射て落とし 同
い、天氣續いた後で瓶びんに成り
廻らねエ奴と女房の櫛くしを借り
白い差し足袋あしふくなぞを穿き遣手出る
醫者と見へやうかと和尚初心なり
註 右四句は 元二十一編追丁卅三裏。
大へ〇△癩か癩病かみは度々見られ
仰向けに成つて女房を嫌がらせ

からだは人間でへ〇△は馬なり
小いさいへ〇△で間男座頭ざとうされ
を削つて、それに替えられたもの、全集
三八五頁上段 お熊が親父 の次に有る
べきが、無い、偶たま此一丁は元刷があつ
た爲め、編者が削つたのであらう、それ
なら、こうてきに悦びます、が其儘は矛
盾。

黒介の一社参りに息子出る 三八五下
死にさうもないで念佛講ぶつこうを退き 行衛未詳
惣銅壺そうど拭きかけて呼ぶ初松魚 同
江口の太夫方便たゆうを一つそ突き 同
あぢき有る世の中で後家面白い 同
十八 全集四九五頁下段第七句 安す助言
の次に 元廿八編廿三丁最後の
そこが後生だと若後家口説かれる
の句が無い、削除か脱漏か、それから其次に
元廿八編廿四丁が、全部欠けて居る、尤も此

一丁は句を削つて削つたのでなく、たゞ削除
したものらしい。尙可考。

新ラ世帯お仕事をかのたまする庚申
蚯蚓かたむしの怨靈うらみチンボウへ取り付き
空尻くうしへ女房〇白の乗り心
我が身みく〇つて人の仕たさを知れ
左右の髭ひげを搔き撫で、乳母ちちをす〇
其味も相變らずに姫始
陰間の起請おこしケツ判はきつい事
福引ふくいに下女は手前の顔を取り
留守をよくしたのと姫は福を抱き
野掛のかけけ道人もキキスの聲を出し
春道のつらさ上戸の連つらに下戸
子故こごの闇くろに行燈いんとうを畫かとぼし
船ふねを折おりかけて禿かぶは櫓こぎ出だし
踏み潰つぶす火玉かたまを貰もらふ野掛のかけけ道
ケチけちな鮓すしこはだの皮かわを飯いに貼貼り
稽古場けいこばのやうに板前いたまへ懸かけて置き

いそがしさ餅に正月物を着せ
米春と鐘撞の氣は十文字

結論 古川柳を取扱ふに方つて、單に之を詩として、其美を味ふだけならば、それが咏せられた時代の點は、次位に置いて差支への無い問題であるが、若しも之に反して、史實の材料とする場合には、時代の詮索を第一に置かねば、飛んだ間違が起る、例へば、食客のことを、すつと以前は、物に掛り、と云ひ次て、掛り人 と云ひ後には居候と云ふ、何時頃左様に變遷したか、間男の首代七兩二歩が後には五兩と成る、何時頃からか、と云ふの類を考へるに方つて、三十年も四十年も相違した材料で考察しては、到底事實の真相を得られるものでない。

柳樽の三十編は、文化元子年の發行で、古翁(初代川柳)の撰置れし句々、と序文に斷つてあるから、まさか其納めてあるものを、寛政

末享和時代の咏と速断する者もあるまいが、若しそれを忘れたら、大きな間違ひが起る、三十編初丁表

人間の巢立ちなるべし宮詣みやまじ
は寶曆八寅年前句附万句合、合印櫻の一表にある句で、文化元年からは、四十六年以前のものである。

七十編十六丁以下、櫻の實は、序文に據れば明和の始めの撰に係り、該編は文政元寅年の發行であるから、五十四年を隔て、居る。元來古書の翻刻は、十分に此等の點を考慮し、底本の取捨に就いて、餘程慎重でなければならぬ、此小記述が柳樽全集に納められた初編から二十九編までの中の、重なる缺點を指摘し得て、該書の所藏者に、多少の參考となつたなら、小生の本懐である。

● 誹風柳樽全集に就ての補遺

神谷冬耳君の御注意に因て下記の如き脱漏のあつた事を發見しました深く同君の御厚意を謝するご同時にまだ見落があらうも知れませぬから御氣附きの方はどうぞ御教示あらんごこし懇請します。

○本書二頁下段十行の次に左の一行を加ふ
16 廿五編 廿六丁 無

○同一七頁上段左より五行十八の前に左記十七ノニを加ふ
十七ノニ 全集四五七頁上段左より二行目
お妾は の次に、元廿五編廿六丁が脱けて居る

元廿五篇廿六丁 全集散在頁
丈ヶ四尺位に積もる秋の雪 二四四上
満座の中で色文を書いて居る 二四〇上
お妾の勧めで銀のチロリ出来 同
何ばいにしろでハ雪に齒が立たず 同
吹殻を後トから拾ふ麗らかさ 同
笑ひ過ごして鬼灯を嫁無くし 四二六下

二階口まで鬼灯が鳴つて来る 同
はがき吹き散る古市の三會目 同
車留肩身を廣く敷あるき 同
楊枝で一度剃刀で耻かしさ 四二五上
布團を三ツあつたかな奴が遣り 同
釣初めと見え冷麥を擔ぎ込み 四〇四上
月の枕言葉苦勞でありイす 三七〇下
粟餅も嫌いやいや廿九日 同
四丁目もまだちらほらと匂ふ也 三七〇上
切遊ひ吾妻女郎に京男 同
小豆は公卿大角豆勇者なり 同
棒の手を見せて和尚ハ馳走する 同
註○小豆は公卿の卿が柳樽にはにと讀める書体であるがそれは筆者の拙い爲め○和尚ハもへと讀める書き方なれどハであり且つハでなくば意味を爲さぬ、類句、棒の手を馳走に見せる深大寺(廿七編六)

『川柳叢書』をお奨めします

古川柳は科學であり藝術である、貴族文學に嫌らない多くの新人は近來此平民文學に傾注して趣味的知識慾の満足を得つゝある。

牛狂堂に於て續刊せんとする『川柳叢書』は、悉く和紙和装の小形本(半紙半裁)で各册色かほりの瀟洒な若紙に絹糸綴、雅な題箋、可愛らしい物で、手に取つただけでも氣持のよい新裝本を提供せんとするのである、今回は左の三冊、

各册定價金壹圓 三册參圓 書留送料貳拾錢

廢姓外骨著

川柳や狂句に見えた外來語

和紙和装 川柳叢書 第一册

(附録)外來語疑似狂句

小泉迂外先生舊稿古俳書に現はれたる外來語

廢姓外骨著

川柳三百人一首

和紙和装雅本 川柳叢書第二篇

(附録)穂積重遠先生所藏「小倉百人一首類書總目錄」著者舊稿「異種百人一首總目錄」

慶紀逸撰

武玉川

和紙和装雅本 川柳叢書第三篇 川柳の源泉 寛延版俳諧前句集「むたまがは」

廢姓外骨編

變態知識

和紙印刷繪畫 數十入 全二册實價金五圓送料金貳拾錢

元祿前後の頃より變態の韻文として行はれたる俳諧前句附、その埋没し居たる前句附及び古川柳を涉獵して、江戸時代の言語、風俗、制度等の考証に引用せし新事業、眞に前人未發の創意、觀察奇抜の卓見として推賞されし本書「變態智識」初號より第十二號迄を例の二冊に合綴せしもの、千古不磨の良書として愛讀すべし。

廢姓外骨著

日本擬人名辭書	一冊	三二八〇
賣春婦異名集	一冊	三二八〇
奇態隨筆	一冊	三二八〇
私刑類行	一冊	三二八〇
此中災難	一冊	三二八〇
賭博類書	一冊	三二八〇
面談類書	一冊	三二八〇
川柳先生語彙	一冊	三二八〇
中田先生時代の文學と私	一冊	三二八〇
法川時代の文學と私	一冊	三二八〇
澤田例外氏著	一冊	三二八〇
縁切寺(川柳松ヶ岡)	一冊	三二八〇

發行所 東京上野櫻木町・牛狂堂
取次所 岐阜市金屋町二丁目
柳書刊行會

跋

本書は柳雨翁が序文で叙べられた如く、三面子先生の好意と翁の盡力とに據て「やなぎ樽研究」第二號の誌上へ掲載せられたのは喜ばしき限りである。

我々川柳家は、此書に因て不完全極まる「誹風柳樽全集」の缺陷を補ふ事を得たのは、衷心から感謝せねばならぬ。斯の如き煩雜なる比較研究は、先生にして初めて之を爲し得るので、他の人の到底企劃する事を許さぬ難事である。先生の柳書蒐集家として且又柳書研究家として盛名あるは人の知る處である。他に蒐集家はあれども其數量は先生に及ばず他に研究家はあれども其精緻は先生に如かぬ。

事實此の如く、すべての点に於て卓絶せる先生の手になれる、貴重なる資料を、少數なる「やなぎ樽研究」の讀者のみにて私しするは、廉潔なる同志編者の忍び得ざる所である。

三面子先生の有益なる玉稿は「やなぎ樽研究」に記載せられ、編者の目的は既に達しられたのであるが、別に小冊子として之を發行し「柳樽全集」の讀者に普く頒布して其缺陷を知らしめんとこの誠意は、利を忘れ慾を棄て、一

意、柳書の刊行に努力せらるゝ編者にして初めて之を見る事が出来るのである。

三面子先生の篤學と、編者の精勵と敢えて此の出版の費用を提供せる桂雨佐々木市太郎君の特志とは、正に柳界の誇りとするに足るであらう。

乙丑初秋蟲の聲を聞きつゝ、

雨の窓に依りて

卯 木

▲正誤▼ 第二號掲載「柳樹全集」に就てし

一〇〇八六五四四頁
上ククク上下上
二七三七三四三行
に見えらし
放當
柳樹
正樹
一頁
上下行
一三三七
誤
正
素引く誘引く
右此一行全
同ハ四六六下
同ノ字削ル

今井卯木氏校訂

誹風 柳多留拾遺 全

菊版半紙布製
紙數四百五十頁
正價金貳圓
送料金拾八錢

江戸の風俗詩たり人事詩たる川柳の精華は、實に初代川柳翁點の實曆天明になつたものである。此時代の句で柳多留に洩れた佳吟を各時代別に又類題別に分ちて、寛政八年に出版されたものが即ち誹風柳樹拾遺二十卷十編である。原本は今を距る百二十九年前江戸を中心として出版されたものであるから現代殊に震災後は市井に現在せる事種で之を得んと欲して容易に得られざる珍籍である。柳樹の先覺者今井卯木先生研鑽多年其の隠れるを正し整はざるを考へて定本を作り、十編全部を自ら嚴重なる校訂を施され、柳樹の温な醫さんが爲に世に出されたるもの即本書である。古川柳及び江戸研究者はこれによりて時勢を勘へ風俗を知るに共に新進作家はこれによりて川柳の眞價を知り作句の参考に供すべき好資料である故に柳樹にある士は素より江戸を研究せんと欲する文壇の士も亦一本を座右に備ふべき、眞に千古不磨の寶典である。

發行所 柳書刊行會
岐阜市金屋町二丁目

發行所 柳書刊行會
岐阜市金屋町二丁目十一番地

本誌取次所

- 大原市南區道頓堀中座前
- 同 南區八幡筋屋敷町角
- 同 南區美屋町二五
- 京都市東丸太町
- 同 京極
- 同 堺町三條下ル
- 東京市本郷區本郷四丁目
- 同 同 本郷四丁目
- 同 芝 區三田一丁目
- 岐阜市柳ヶ瀬百貨堂内

- 明文堂書店
- 柳屋書店
- だるま屋書店
- 西川誠光堂
- 三宅書店
- ちご書店
- 思成堂書店
- 文武堂書店
- 徳文堂書店
- 松田書店

大正十四年九月十五日印刷
大正十四年九月二十日發行

定價金貳拾五錢

著者 岡田三面子

發行者 篠田一

印刷者 白井延次

印刷所 白井印刷所

296
282

終